

26 訪問看護師の視覚メディアによる初回訪問での療養者と関係を築くための言動とその意図

○森下 和恵（旧所属 ポップケア訪問看護ステーション
現所属 武庫川女子大学看護学部）

新田 紀枝（武庫川女子大学看護学部）

久山 かおる（武庫川女子大学看護学部）

早川 りか（武庫川女子大学看護学部）

【研究目的】

新人訪問看護師と熟練訪問看護師を対象にして、初回訪問場面の事例を設定したフェイスシートと住居写真の視覚情報（以下、視覚メディア）を提示し、視覚メディアをもとに初回訪問での療養者と関係を築くための言動とその意図の語りからそれぞれの特徴を明らかにすることを目的とした。

【研究の必要性】

訪問看護師は療養者宅へ訪問し看護ケアを提供している。訪問看護師は単独訪問が多く、他の訪問看護師から直接学ぶ機会が乏しい。先行研究（堀, 水口, 松下, 2006）では、初回訪問において療養者の観察、アセスメント、状況判断が難しいことが報告されている。そのため、訪問看護師が初めて訪問する療養者宅で療養者の現状を把握することや今後どのように対応するのか不安を感じていると考えられた。

そこで本研究に先立ち、熟練訪問看護師が療養者と関係を築くために行っている言動と意図に関する研究を実施した（森下, 新田, 久山, 2020）。その結果、熟練訪問看護師は事前情報と自分の五感から得た情報から療養者の全体像をイメージし、療養者、家族の雰囲気から自らの言動を慎重に選び、訪問看護サービスの開始や継続して訪問できる関係を築けるように働きかけていたことが明らかとなった。

初回訪問は、看護師と療養者が初めて出会い、短時間の中で関係を築くことは容易ではなく、次に訪問することができなければ関係を発展させることが困難になる。訪問看護師と療養者の関係は毎回の訪問場面毎に深まったり停滞するなど変化する（上野, 2000）ことが指摘されており、初回訪問から次の訪問ができるようにつなげることが関係を築くための第一歩であると思われる。しかし、必要な看護ケアを判断する力は、訪問看護の経験年数の違いによって左右されることがと考えられた。

そこで、同じ住環境を再現するために簡便で、経済的負担も少ない写真を使い、視覚メディア（フェイスシートと住居写真）を作成し、初回訪問において新人訪問看護師と熟練訪問看護師が療養者と関係を築くために行う言動とその意図について、それぞれの特徴を

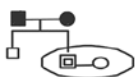
明らかにすることを目的に研究を行うこととした。

【研究計画】

研究対象者は、A 県内の看護師経験があり訪問看護経験 1 年以下で訪問看護事業所に勤務する訪問看護師（以下、新人看護師）約 16 名、看護師経験年数 5 年以上であり訪問看護経験 5 年以上である訪問看護師（以下、熟練訪問看護師）約 15 名を対象とした。依頼手順は、研究者が訪問看護事業所の管理者に連絡し、研究依頼を行った。研究の同意が得られた対象者に研究の主旨を説明し研究協力の内諾を得た後、再度文書による承諾を得た。

実施場所は、対象者が勤務する訪問看護事業所内もしくは対象者が希望するプライバシーが確保できる場所とした。データ収集方法は、新人訪問看護師と熟練訪問看護師に研究用に作成した視覚メディア（図 1、図 2）を見てもらった上で、インタビューガイドに基づき半構造化面接を行った。インタビュー内容は、対象の許可を得て IC レコーダーに録音した。インタビューデータは業者に依頼して逐語録を作成した。逐語録から療養者と関係を築くための意図と言動に関する内容を抽出し、質的記述的に分析を行った。分析は共同研究者と行い、適宜、質的研究者のスーパーヴァイズを受けた。

倫理面への配慮として、研究実施にあたり武庫川女子大学倫理審査委員会の承認を得て研究を実施した。研究対象者に研究の目的・内容について説明し、研究への参加は自由意思であること、同意しない場合であっても不利益にならないこと、得られた情報は研究以外の目的で使用しないことを説明し同意を得た。逐語録作成を依頼する業者と守秘義務に関する誓約書を交わした。研究の成果は営利目的のために利用していない。

◎主たる傷病名：脳梗塞	
◎家族構成  兄は九州に住んでいる	◎キーパーソン 花子（妻）（78 歳） ・緊急連絡先：06-5678-1234 ・妻は腰痛があり、整骨院に通っている。
◎介護度：要介護 3	
◎サービス利用の経緯 2018 年 4 月手足の力が入らなくなり、動けなくなったため救急車で病院搬送され入院。脳梗塞後、左片麻痺があり、2 か月後リハビリのため転院する。退院後は、妻の協力のもと生活しているが、活動する範囲も限られ動かなくなったため、トイレ介助等で介護負担が増えたと感じている。本人もむせることが多くなってきたこと、身体が思うように動かなくなったことを主治医に相談したところ訪問看護師の話があり、相談に乗ってほしいとサービスの希望があった。	



【実施内容・結果】

1. 実施内容

新人訪問看護師と熟練訪問看護師に視覚メディアを見てもらい、初めて訪問した時の注目点とその理由について、半構造化面接を実施した。なお、事例は架空であり、視覚情報

に該当する写真は居住者から文書で研究使用のための撮影の同意を得て使用した。

逐語録から事例の療養者のお宅に初めて訪問し、部屋に通される中で注目するところに関する内容を抽出し、共同研究者とともに質的記述的に分析を行った。

2. 結果

1) 対象者の属性

新人訪問看護師は、平均年齢が 38.3 歳、平均看護師経験年数が 13.3 年、平均訪問看護師経験年数が 1.0 年であった。熟練訪問看護師は、平均年齢が 49.8 歳、平均看護師経験年数が 12.7 年、平均訪問看護師経験年数が 12.3 年であった。

2) フェイスシートを見た時の注目点とその理由

注目点を「」、コードを[] で示す。

新人訪問看護師の注目点は「介護負担が増えていると感じていること」、「二人暮らし」、の順に多かった。注目した理由は「介護負担が増えていると感じていること」には[介護負担の内容を知りたい]、[介護負担の原因を予測に役立てる]などがあった。「二人暮らし」には[緊急時の対応について考える]、[他の支援者の有無を知るため]などがあった。

熟練訪問看護師の注目点は「二人暮らし」、「妻の健康状態」、の順に多かった。注目した理由は「二人暮らし」には、[緊急時の対応について考える]、[他の支援者の有無を知るため]などがあった。「妻の健康状態」には[妻にかかる介護負担の程度を知るため]、[妻の病気の有無を知るため]があった。

3) 住居写真を見た時の注目点とその理由

新人訪問看護師の注目点は「車いす」、「廊下」の順に多かった。注目した理由は「車いす」には、[車いすを使った移動方法をイメージする]、[置いている位置から利用方法をイメージする]などがあった。「廊下」には[廊下の状況を理解する]、[廊下での移動方法の危険性を考える]があった。

熟練訪問看護師の注目点は「車いす」、「居室の空間」の順に多かった。注目した理由は「車いす」には、[車いすの利用方法を考える]があった。「居室の空間」には[居室で見たものの対応を考える]、[生活習慣をイメージする]があった。

4) 設定事例の中で療養者宅に訪問するときに留意するところ

新人訪問看護師は「訪問看護師の態度」、「情報収集」の順に多かった。「訪問看護師の態度」に留意する理由は「病気になってから時間が経っても落ち込む時期ってあると思うため、今の気持ちを聞いて関わりたい」などがあった。

熟練訪問看護師は「訪問看護師の態度」、「本人・家族に与える印象」が同数に多かった。「訪問看護師の態度」に留意する理由は「震災や家族を亡くしているなど触れないでという話、マイナスな情報は絶対触れないようにしている」などがあった。

5) 事例の中で関係を築こうと思うときに重要だと考えたこと

新人訪問看護師は「初回訪問で訪問看護師のイメージが崩れてしまうと次の訪問につながらないから」など、[療養者や家族に対し訪問看護の印象が悪くならないようにする]こ

とや「療養者の思いを知るために一緒に考えていきたいから」など、[話を聞かせてもらう態度を示す]ことが重要だと考えていた。

熟練訪問看護師は「一回目の訪問は大事だと思っているから印象は大事」など[印象を考え、自身の表情や言葉遣いに気を配る]ことや「一緒に考えていくこと、どうやったら意欲を持ってもらえるのかを考えたいから」など[療養者が主体的に考えられるよう働きかける]ことを重要だと考えていた。

6) 事例以外で関係を築こうと思うときに重要だと考えたこと

新人訪問看護師は「訪問看護師は家に入っていき立場だから、こちらの思いを押しつけない」など「生活の中で聞きやすい項目の話を選んで聞く」ことを重要だと考えていた。

熟練訪問看護師は、「家の環境を見て、生活しやすいようにするには何が必要かを考えながら雑談をする」など[相談しやすい雰囲気を出すようにする]ことを重要だと考えていた。

【考察と今後の課題】

1. 考察

フェイスシートを見た時、新人訪問看護師は介護負担が増えているという情報から、負担の解消について協力者の有無は不可欠であるという認識から家族構成の二人暮らしに注目していたのではないかと考えられる。熟練訪問看護師は、療養者と妻が二人暮らしであることを見て、高齢である二人の今後の生活を見据え協力者の存在を気にしていた。そして、自宅での生活を継続していく上で家族の介護力が影響することが考えられるため「妻の健康状態」に注目していたのではないかと考えられる。

一方、住居写真を見た時、新人訪問看護師はフェイスシートには杖歩行の記載であったが、玄関に入ったところに車いすがあり、すぐに視界に入ったので注目したと考えられる。車いすには、新人訪問看護師だけでなく熟練訪問看護師も注目しており、車いすを置いてある位置や2台あること、ADLの情報から、利用方法に疑問を感じたため、利用方法を考えることやイメージしようとしていたのではないかと考えられる。また、廊下に注目したことについても、疾患の特徴とADLの状態を踏まえ、環境を見た時に、廊下の移動方法に疑問を感じたことが、注目していたことにつながっていたと考えられる。これより、訪問看護師は、身体の状態と今の暮らしの想像がつかない状況に注目していたことが考えられた。そして、注目したことは、療養者が暮らしているプライベートな空間であることから、関係が築けていない初回訪問において療養者に質問する前に、まずは今までの経験からイメージを膨らませ、見た環境から療養者の暮らしを理解しようとしていたと考えられる。

設定事例の中で療養者宅に訪問するときに留意するところでは、新人訪問看護師は、療養者の気持ちに配慮する「訪問看護師の態度」や「情報収集の方法」について留意しており、その内容から訪問看護師自身の態度に焦点があたっていたことが考えられた。このことは、新人訪問看護師がサービス導入に対し、自分の影響で導入が拒否されないように意識しているからではないかと考えられる。熟練訪問看護師は、自身が相手に与える態度に

焦点をあてていると思われた。相手に焦点をあてるということは、療養者が中心であることを態度で示し、療養者が思いを吐露しやすい環境を意図的に作ろうとしていたのではないかと考えられる。

関係を築こうと思うときに重要だと考えたことでは、新人訪問看護師は、療養者の今の気持ちを知りたいと訪問看護を利用することへの気持ちを確認したいと考えていた。そして、マナーや話しをする態度が療養者・家族に与える印象を重要だと考えていた。それは、訪問看護は療養者が選択し、契約を交わして利用が開始となるサービスであるため、療養者や家族の害にならないことがサービス導入につながると思っているからだと考えられる。そのため、マナーや態度に気を配り、訪問看護師が何をするのか認識を持ってもらうことで、療養者や家族から選んでもらうために働きかけることが関係を築こうとする時に重要だと考えていたことが考えられる。

2. 今後の課題

本研究の結果から、初回訪問時の注目点から住環境の捉え方、訪問看護師の態度を可視化し、新人訪問看護師の成長を助けられるようなツールを作成し、初めて訪問する時の参考になることや住環境を見て学ぶトレーニングツールとして活用し、独り立ちの一助なるよう、スタッフの育成支援につなげていきたいと考える。

【引用文献】

堀良子, 水口陽子, 松下由美子他. (2006). コンピューターを利用した訪問看護における看護技術学習支援教材の開発－安全性の確保に焦点を当てて－, 新潟県立看護大学看護研究交流センター年報, 17, 31-36.

森下和恵, 新田紀枝, 久山かおる. (2020). 訪問看護認定看護師が療養者と関係を築くために実施している初回訪問時の言動とその意図, 日本在宅看護学会誌 9(1), 32-44.

上野まり. (2000). 訪問看護における看護婦－対象関係の形成過程, 千葉看護学会会誌 6(1), 42-48.

【経費使途明細】

使 途	金 額
通信費（研究依頼書郵送費・切手） @ 82×30	2,460 円
旅費交通費（インタビューの交通費） @1,000×30	30,000 円
謝金（協力に対する謝金 クオカード） @1,000×30	30,000 円
委託費（逐語録作成 東オフィス） 30分@9,000×30	270,000 円
合 計	332,460 円
大同生命厚生事業団助成金	300,000 円